

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 殿

福岡県病虫害防除所長

平成23年度病虫害発生予報第12号（3月）について

このことについて、病虫害発生予報第12号を発表したので送付します。

予報第12号

いもち病の対策は、種子消毒の徹底から始めましょう！

昨年多発したイネのいもち病は、種子が第一次伝染源となるため、27産地・81地点の籾の保菌率調査を行いました。その結果、品種により異なりますが、全体では平均で0.7%の保菌率でした。

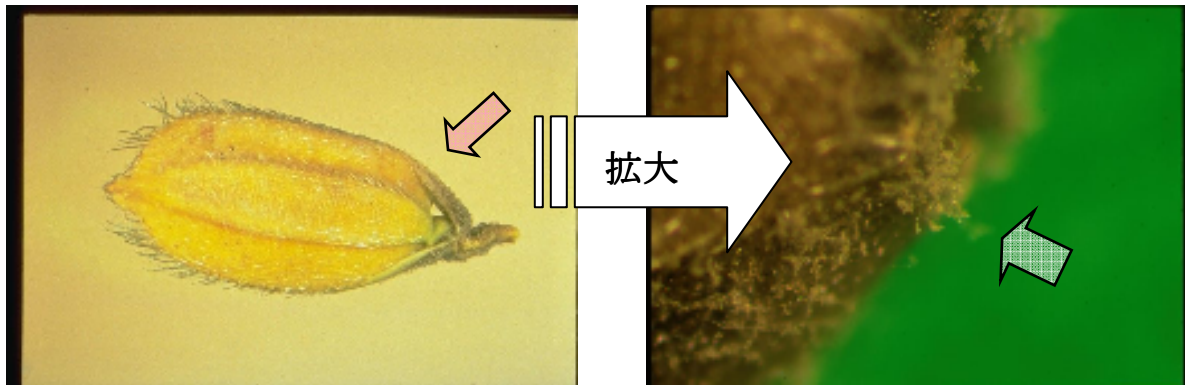
いもち病が大発生した平成5年産籾の2.5%と比較すると、少ない保菌率となっていますが、ほ場における発生は、播種後の気象に大きく左右されますので、適切な防除に心がけてください。

<防除の考え方>

- ・ 種子は、外見が健全でも感染している場合があるので、種子消毒を徹底する。
- ・ 移植後も予察情報等を参考に、発生状況に注意し、初期防除を含めた防除対策を講じる。

籾での感染の様子（シャーレで3日間湿潤処理）

いもち病菌



<予想される向こう1か月の天候（平成24年2月25日～平成24年3月24日）>

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並か高いでしょう。降水量は多く、日照時間は少ないでしょう。

週別の気温は、1週目は平年並か低く、2週間目は高く、3～4週間目は平年並でしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

要素	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20	40	40
降水量	20	30	50
日照時間	50	30	20

（福岡管区气象台 平成24年2月24日発表抜粋）

3月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (3月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	うどんこ病 ハダニ類	少 やや多	やや少 やや多	やや多 やや多
冬春ナス	すすかび病 ミナミキイロアザミウマ	やや多 多	多 多	多 並
冬春トマト	灰色かび病	並	やや多	やや多
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病	やや少 多	並 多	やや多 多
茶	カンザワハダニ	少 *発生時期：並	少	並

*茶の発生量（現況）は、裾葉の発生量

作物別発生予報

- 注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。
 注②：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【野菜：冬春イチゴ】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

発病株率 0.1%（平年 0.9%、前年 0.3%）

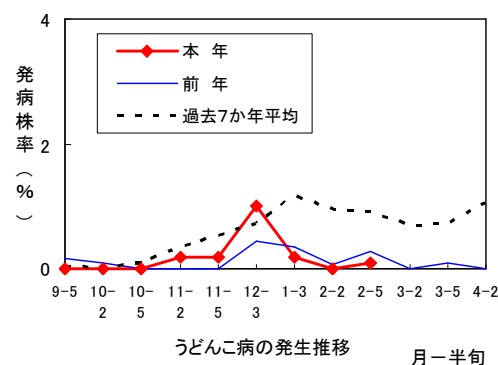
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 早期発見に努め、下葉かぎ後、薬液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え異なる系統の薬剤を散布する。



2 ハダニ類

(1) 予報の内容

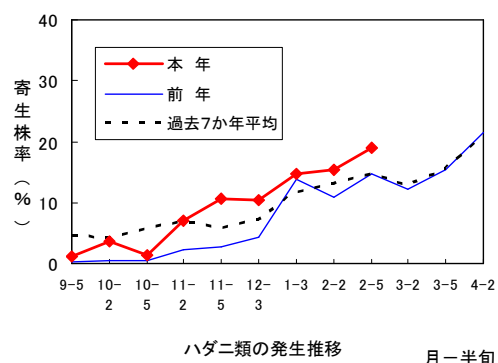
発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（+）。

寄生株率 19.1%（平年 14.7%、前年 14.7%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている（+）。



(3) 防除上の注意

- ア 本種は、はじめスポット的に発生し、下位葉ほど寄生が多いので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生を認めたら早めに防除を行う。
- イ 防除は摘葉後に行い、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。
- ウ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。
- エ カブリダニ類等を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布する。

【野菜：冬春ナス】

1 すすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

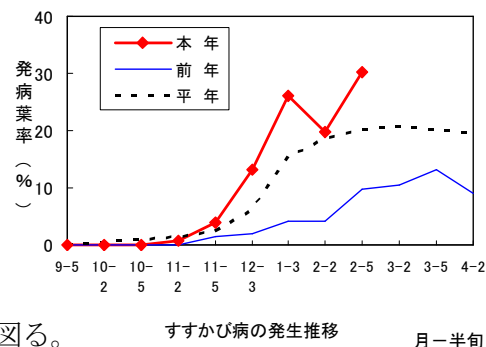
ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

発病葉率 30.1% (平年 20.2%、前年 9.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 多湿条件下で発病が進展・増加するので、施設内の換気を図る。
- イ 草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。
- ウ 病徴が進展してからでは防除が困難なので、発病初期に防除を徹底する。
- エ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

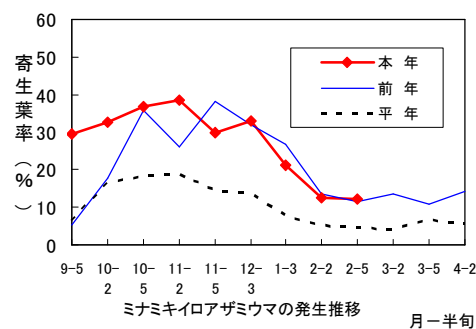
寄生葉率 12.0% (平年 4.5%、前年 11.4%)

被害果率 0% (平年 0.3%、前年 1.0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている(+)

(3) 防除上の注意

- ア 葉裏への寄生が多いので、散布むらがないように丁寧に散布する。
多発ほ場は、散布約1週間後に再度防除を行う。
- イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：冬春トマト】

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0.2% (平年 0.3%、前年 0.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

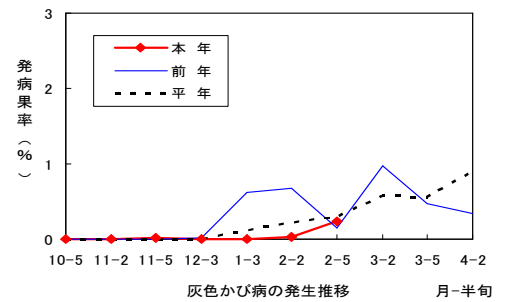
ア 罹病葉、罹病果は見つけ次第処分する。

イ ハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 開花後の萎れた花卉や葉先枯れは、伝染源となるので取り除く。

エ 農薬の散布は晴天の日中に行い、十分に換気して夕方密閉するまでに、薬液が乾くようにする。

オ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：冬春キュウリ】

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-）。

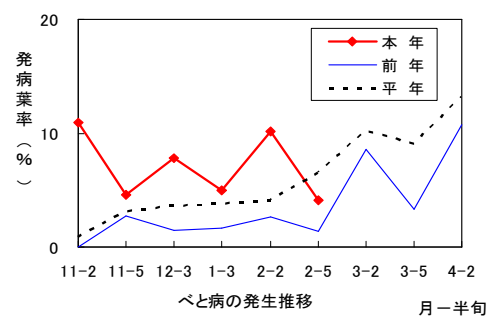
発病葉率 4.1%（平年 6.5%、前年 1.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

イ 肥料切れや成り込みによる草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 2月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

発病葉率 12.0%（平年 1.4%、前年 3.5%）

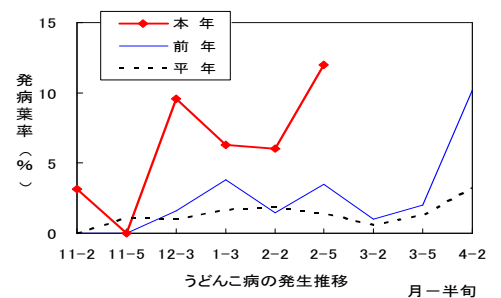
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高く、降水量は多いとされている（+）。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないよう管理する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (3月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬春イチゴ 灰色かび病	やや少	並	並	・罹病果は見つけ次第除去する。 また、下葉かぎを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。
冬春ナス 灰色かび病	少	やや少	やや多	・罹病葉や罹病果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
うどんこ病	少	少	並	
コナジラミ類	やや少	やや少	並	
冬春トマト 葉かび病	少	少	並	・抵抗性品種を栽培しているほ場でも発生しているため、すすかび病の防除も兼ねて予防散布を行う。 ・本種は、トマト黄化葉巻病(TYLCV)の媒介虫なので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外へ持ち出すとともに、本種の防除を徹底する。
コナジラミ類	並	並	並	
冬春キュウリ 灰色かび病	やや少	やや多	やや多	・開花後の萎れた花卉に、灰色のかびを認めたら防除を開始する。 ・本種は、キュウリ黄化えそ病(MYSV)の媒介虫なので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外へ持ち出すとともに、本種の防除を徹底する。 ・本種は、キュウリ退緑黄化病(CCYV)の媒介虫なので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外へ持ち出すとともに、本種の防除を徹底する。
褐斑病	少	やや少	並	
ミナミキイロ アザミウマ	やや少	やや少	やや多	
コナジラミ類	並	並	並	

【茶】

1 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生時期：平年並

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

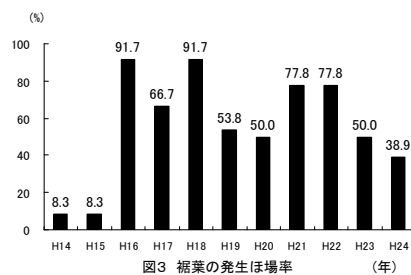
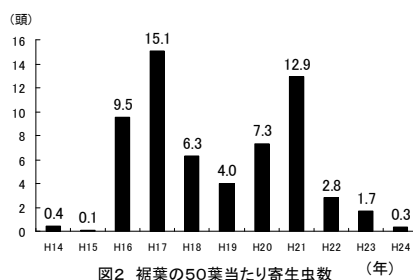
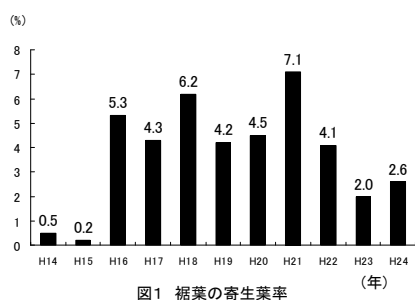
ア 2月5半旬調査の結果、裾葉における発生量は平年より少なかった(一)。

<裾葉>

寄生葉率 2.6% (平年 3.9%、前年 2.0%)

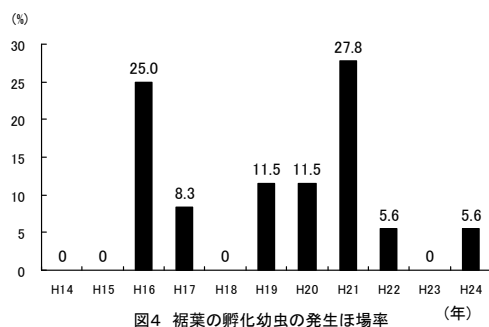
50葉当たり寄生虫 0.3頭 (平年 6.0頭、前年 1.7頭)

発生ほ場率 38.9% (平年 57.6%、前年 50.0%)



イ 裾葉の越冬後第1世代孵化幼虫の発生ほ場率は、平年よりやや低く、現在のところ発生時期は平年よりやや遅い（－）。

ウ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年並か高いと予想されており、今後発生時期はやや早期化すると予想される（＋）。



(3) 防除上の注意

ア 裾葉を中心に発生状況をよく観察し、越冬成虫の寄生葉率が2%以上である場合は、成虫、幼虫、卵に効果の高い薬剤で速やかに防除を行う。

イ 春期の基本防除は、孵化幼虫の発生初期をねらって、平坦地で3月3日～10日頃、山間地で3月10日～20日頃を目安に徹底する。

ウ 薬剤は、寄生の多い裾葉・葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>
電子メール kfok0301@sp.jppn.ne.jp

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。
(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。